

氏 名 ^{やま}山 ^{がみ}上 ^{まさ}雅 ^こ子
 学位(専攻分野) 博 士 (教育学)
 学位記番号 論教博第76号
 学位授与の日付 平成10年7月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 自閉症児の初期発達についての発達臨床的研究

(主査)

論文調査委員 教授 齋藤久美子 教授 山中康裕 教授 東山紘久

論 文 内 容 の 要 旨

Kanner. L (1943) により最早発型の子どもの精神病として提唱されて以来の自閉症は、1970年代にはRutter. Mらの認知・言語の障害が一次的であるとする考え方へと移行し、多様な生物学的要因の下に、生後30カ月以前に発症する広汎性の発達障害であるとの理解が定説化するが、さらに心の理論障害説や感情認知障害説へと発展していること、それらを踏まえた自閉症論がまず詳細に展望されている。他の障害と比較して乳児期の発見が困難であり、診断が確定するのが2歳半以降であるなど、特異な経過をたどるその発達障害の実態がなお未解明であることを問題視し、論文の目的を自閉症固有の発達障害の解明、早期発見や早期療育、心理的援助の課題を明らかにすることだとしている。

第1部では、まず関連見解の歴史的展望が行われ、症状の兆候、顕在化、および改善の過程に絡む要因の検討が、今日の自閉症研究の中心的課題であることが確認されている。次いで初期発達研究の理論的検討を踏まえ、自験例50例に対する社会性の発達と発達の阻害要因についての調査、および12例の症状顕在化までの詳細な発達経過を分析している。それらの結果を総合して、「折れ線型」や「漸進型」の区別を問わず、愛着形成の躓きに端を発した「関係性の障害」が、発達の臨界期での躓きをもたらし、認知発達にも特異な歪みを産みながら、乳児期の「消極的問題」から1歳半頃の「積極的な症状」へと質的に変化していくのが、自閉症の発達障害の特性であろうとの仮説が提示された。

第2部では、第1部で提起した上記仮説の妥当性の検証が試みられた。愛着の再形成と自閉症固有の発達障害および行動異常の改善との間に関係が認められるかにつき、発達臨床的アプローチを適用した8例について検討が進められている。愛着対象を停泊点として「感覚運動的活動が高次化する過程」と、愛着関係の定着による「愛着対象との興味の共有体験の発達」という二つの発達路線が事例の中で統合されるのが見られ、従来自閉症の中核的障害とされてきた **joint attention** や象徴機能の障害が、それを通して改善された。またその過程は、身体感覚や活動が身体図式へと体制化される過程でもあることが明らかにされ、愛着関係を介して認知機能と身体的自我の機能が表裏一体的に発達することを、包括的な模式図として提示している。以上の結果から、自閉症児への早期援助においては、養育者との愛着関係の発達、愛着関係を土壌とした認知発達の高次化、および身体的自我の発達が課題となり、母子関係の発達に援助の焦点を絞った発達援助的アプローチが有効であると指摘された。しかし表象機能の獲得が、表象レベルでの新たな症状を顕在化させるきらいがあることが一方で認められ、愛着関係の形成は自閉症の症状改善の必要条件ではあるが十分条件ではなく、症状は発達の到達段階に応じて変化していくことの重要性が再認識された。

第3部では、自閉症を関係性の障害として捉える見解の妥当性を、まず表象段階以降に認められる特徴的な症状との関連で検討している。長期追跡事例4例の発達を、心理診断結果と残遺症状をつきあわせて検討した結果、発達早期の関係性の障害は、他者との関係のなかで育つ言語の意味内包の発達障害へと引き継がれていく傾向が際だって見られた。またその障害を補う一種の防衛機制として、記号的知識への依存、他者の行動の形動的なぞりや写し取りがめだつことが指摘された。そのような特異な発達障害と体験様式ゆえに、自閉症児は脅威や不安に曝され易く、発達の節目ごとに独特の危機に陥るの

が認められた。その心理的危機に対する援助の実際を、1事例の心理療法過程を例に検討した結果、第2部で指摘した発達援助的アプローチと併せて、自閉症児の内的成長を支える心理療法を行うことが必要かつ有効であるのを見出している。

以上、本論文では自閉症に特有の発達障害の実態を、「関係性の障害」の視点を中心に据えて検討し、「関係性の障害」が自閉症の症状形成、固定化、発達に伴う変容過程全体を貫いているのを具体的に検証した。「関係性の障害」が自閉症の発達障害の本態に迫る上で有効な「視座」であり、また心理的援助の基盤をなす重要なテーマであることから、今後さらに援助方法を確立していく課題が残ることが指摘されている。

論文審査の結果の要旨

本論文の評価は主に以下4点をめぐって行われた。

1. 自閉症理論・研究に関する広く詳細な展望と著者自身の立場の提示：1940年代の「精神病」説、1970年代の「認知・言語障害」説から1980年代の「広汎性発達障害」の定説化を経て、現在の「心の理論障害」説や「感情認知障害」説へと至る展開の中で、著者が同時代的にそこに身を置きつつ各理論を偏りなく詳細に検討した仕事そのものがまず注目される。それは30年にわたる児童相談所などでの相談実践者の視点からのものであり、実践に適う理解の枠組みの意欲的な構築を意味するものである。そこにはSpitz, R.をはじめとする心理力動的な愛着理論もとり入れられており、対人的「関係性」を中心視点として据えながら、①感覚運動系 (Wallon, H.による身体感覚、身体図式を加え)、②音声言語系、③情意系、④症状などの多次元の系を有機的に組み合わせた理解の枠組みの構築へと到っている。それは綿密で総合的な一つのモデルの提示であり、0歳段階からの症状形成過程を把握し直す枠組みと、他方症状改善過程を実態に即して明らかにするための枠組み、それら両方にわたる包括的なスケールのものである。

2. 自閉症児への臨床発達の援助の実践記録：自験例50事例につき、2歳時から青年期までの介入を含む長期縦断的な臨床発達の過程が報告されている。1でとりあげた枠組みを用い、そこにテスト所見や診断的評価を合わせ、系統立った丹念なデータ集積を進めて行っている。全体としては膨大な記録量に及ぶが、仮に1事例を取り上げて見ても、臨床データの端々に豊かな示唆がうかがえる事例研究となっている。事例毎に経年的な変化過程が、発達の節目での独特の混乱や躓き、退行、限界性、他方驚くばかりに模倣や象徴機能の獲得に到るプラスの展開などが説得性をもってリアルに報告されており、極めてデータ価値の高いものになっている。

3. 臨床発達の援助の方法、連携ネットワークの開拓、検証：個々の事例の特徴、また環境条件に応じて、更には発達時点での必要性に基づき、「療育指導」、「心理療法」、「専門的連携システムの活用」など常に複数の介入レパートリーを用意しながら、柔軟な判断の下に可能な範囲で最適の方法を選出していく努力が全体を貫いている。その中で「心理療法」的アプローチが持つ「自我の保育」的機能の再認識およびその有効性も本論文の一つの主張であるが、常に全体状況の中でのその位置づけを怠らない姿勢が保たれている。裾野の広い理論基盤による実際的対応の力量がここにもよく現れている。実践と理論モデルとが互いに生産的に循環しあう相互関係の中で、実践の成果も、理解の枠組みの側も、共に検証、修正・発展に向かうという緊密な相助性が見られる。

4. 本論文の独自性：本論文はドイツ語圏のものを含む内外の多数の文献（著者のもの計15）の展望と実に豊富で密度の高い自験例報告、実践活動の成果を含む大著である。そのスケールの中にあるいは隠れてしまいがちながら、独自性は次のように指摘できよう。何よりも、重要な多くの視座を網羅した多次元的で包括的なモデルの提示そのものが、まさに著者独自のものである。この視座の全体性は、臨床実践の地平で、臨床発達の現実の側から理論・研究を広く捉え直す希有な力量があってはじめて、可能となるものである。また発達過程の中で各節目が新しい自閉の症状化をもたらすとの見解も、息の長い精緻な追跡あってこそ、独自の発見と言えるであろう。

今後の更なる研究の発展としては、症児にとり新たな発達課題は単に「壁」として立ちはだかるだけなのかどうか、症児にとり「発達の節目」とはどのような意味合いのものであるのか、一層踏み込んだ理解の展開が期待される。また、「関係性」の視点を症児特異的な形で更に分化させていくことについての期待も同様である。本論文で提出されているデータはそれらのことに向けての可能性を既に含みもっていると思われる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成10年6月16日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。